

# ラウンドテーブル コルチャックの ” サマーキャンプ” 活動について

企画代表 塚本智宏 (名寄市立大学)

本ラウンドテーブルでは、ヤヌシュ・コルチャック (1878-1942) が若い時代より関心を持ち小児科医となって実際にその活動に従事したサマーキャンプ (夏季コロニー) 活動に焦点をしばって、コルチャックの教育活動や子ども観について意見交換してみたい。

このサマーキャンプ活動は、主として夏季 3-4 週間、都市の貧困層の子どもたちを郊外のキャンプ休暇村・施設に招き、心身の健康・回復をめざして行われた医療的教育活動である。中欧で始まりポーランドでは 1880 年代から医者たちによってこの活動が始められ、20 世紀に入って本格的な展開を見せる。コルチャックも 1904 年からこの活動に参加し、その体験をもとにこのキャンプの様子を『モシキとヨシキとスルーレ』(1909)や『ユジキ、ヤシキ、フランキ』(1910) といった子ども向けの読み物を著し、その後、1920 年には独立後ポーランドの後継活動家たちに向けた著作、『子どもをいかに愛するか』の一編として、サマーキャンプ編を発表している。これはまさに反省的实践家の活動報告とあってよいであろう。なおこのサマーキャンプ活動はポーランドにおいてもっとも広く普及したといわれているが、コルチャックはここで後に孤児院の自治活動のなかで展開される有名な実践、仲間裁判等をすでに試みていた。

当時の歴史的背景や歴史的条件のもとでこの活動がもった歴史的・教育的意義を議論しながら、さらに現代ヨーロッパにおいてなお展開される夏季休暇中の郊外キャンプ活動あるいは森の幼稚園といった自然や森林が持つ教育的な力などにも視野を広げて議論をしてみたい。

進行・司会者 石川道夫 (藤田保健衛生大学)

報告Ⅰ サマーキャンプと青年コルチャック

報告Ⅱ コルチャック『子どもをいかに愛するか』(サマーキャンプ編) について

報告Ⅲ コルチャックへの関心と「森のようちえん」の試み

質疑・討議

## 報告Ⅰ サマーキャンプと青年コルチャック - 子ども集団との初めての出会い

鈴木亜里 (北海道大学・院生)

コルチャックが孤児院ドム・シエロットの院長になる前、彼は小児科医として病院に勤めていた。その当時、彼は家庭教師や無料図書館でのボランティアなどを通して、また貧困地区に暮らす子どもたちを訪問するなどして様々な子どもたちと関わっていた。しかし子ども集団と関わったのは、ワルシャワサマーキャンプ協会のキャンプ活動が初めてであった。このサマーキャンプは、貧困層家庭の子どもたちの健康回復と心身の発達を保障するという目的のもと、1882年に初めて実施されて以来毎年行われていたもので、その活動規模は年々拡大していった。コルチャックは 1904 年、1907 年、1908 年にこの協会が主催するサマーキャンプに指導員として参加するが、そこで「(子どもたちの) 自主的な活動の中で教育実践のイロハを知った」という。彼自身のこの言葉にあるように、青年時代におけるサマーキャンプでの経験が彼のその後の教育活動に大きな影響を与えていた。本報告では、このサマーキャンプに焦点をあてて若きコルチャックの教育活動を検討してみたい。その際にまず、

1. ヨーロッパおよびポーランドにおけるサマーキャンプ事業の起源や広がり、また、
2. コルチャックが属していたワルシャワサマーキャンプ協会の活動について概観した後、
3. 彼がサマーキャンプで取り組んだいくつかの試みの中で子どもたちとどのように関わっ

ていたのか、またそこから何を学んだのかを明らかにしてみたい。

## 報告Ⅱ

### コルチャック『子どもをいかに愛するか』（サマーキャンプ編）について

塚本智宏（名寄市立大学）

『子どもをいかに愛するか』はコルチャックの最も重要な教育学作品であるが、サマーキャンプ（夏季コロニー）編は、その一部としてポーランドの独立直後 1920 年に出版された。既に 1918 年に出版されていた家庭の子ども編が子どもの「個」を対象にした作品であったのに対して、このサマーキャンプ編は、寄宿学校編（1920 年）とともに子ども「集団」を対象とするものであり、施設養育・養護教育等の活動の分野で、若い指導員・教育者が通常の学校教育とは異なる環境・条件の中で、いかなる教育活動を展開することが望ましいのか、これを自らの体験に基づき探究しようとしたものである。ほぼ全体 50 章の前半では、若々しい夢と理想をもって参加したものの結局子どもの群れ・集団との葛藤を経験し失敗したことの数々が回想・分析されている。後半ではその失敗経験を土台にして再開・展開される経験の数々が紹介されている。こういった文脈のなかで、その後の彼の子ども達に対するスタンスを決定づけたと思われる次のような単純明快な定式が提示されている。

「ある日、森の中で話をしたときのこと、私ははじめて、子どもにではなく、子どもと話をしたのである。それも、私が望むところの彼らがどうあるべきかということについてではなく、彼ら自身がどのように望みどのようにありうるかということについて話をしたのである。」

本報告では、本編のなかのこういった定式を含めて、子どもとの出会いから大人・子ども相互の関係づくりのプロセスのなかで彼が実践的に追究していた、いわば教育の諸原理について考察してみたい。

## 報告Ⅲ コルチャックへの関心と「森のようちえん」の試み

柴田千賀子（福島大学大学・院生）

柴田卓（自然学校キッツ森のようちえん代表）

幼稚園での保育実践の反省や「自然学校・森のようちえん」の試みを通して、コルチャックへの深い関心が芽生えてきた。本報告では、以下の 3 点に焦点をあてて報告したい。

①保育者（教師）が子どもをどのように理解するかによって、子どもの見え方が大きく違ってくる。ニュージーランドのテ・ファリキを原理とする「学びの物語」には、子ども理解の新たな可能性が示されているが、子どもを理解することはとても複雑で難しいものである。しかし、「学びの物語」の基にあるコルチャックの子ども観まで遡ることで、子どもを理解する糸口が見いだせるのではないかと考える。そこで、コルチャックの子ども観と保育者（教師）の子ども理解についての検討を試みたい。

②デンマークで誕生し日本でも取り組まれている「森のようちえん」の実践を通して見えてきた“子どもと大人の関係性”とコルチャックの子ども観について、東北の森を中心に活動する「自然学校キッツ森のようちえん」の活動を紹介しながら、考察してみたい。

③ポーランドを訪れ、タイス教授夫妻（ワルシャワ大学）からコルチャックの思想と保育について講義を受けた（2011.3）。そこでは、ポーランドの保育の中でのコルチャック思想の受け止められ方が語られた。教育実践の中で、コルチャックの思想がどのように実践と結びつくのかについて検討してみたい。